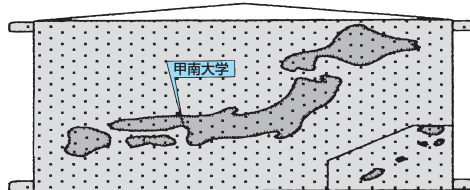


Zephyr

〈第65号〉

ゼフィール・にしかぜ



<http://www.kilc.konan-u.ac.jp>

《特集＊日本に定着している各国の文化》

★所長からのメッセージ：外来語の影響と英語学習	津田 信男	2
〔英語〕ヨーロッパ文化との交流：「和魂洋才」	中村 耕二	3
〔ドイツ語〕日本に広がったドイツの焼き菓子 ～第一次世界大戦と関東大震災を乗り越えたドイツのケーキ職人～	野村 幸宏	4
〔フランス語〕日常に見るフランス語	ディディエ・シッシュ	5
〔中国語〕日本と中国、その深いつながりへ	石井 康一	6
〔韓国語〕日本社会にみる韓国の肉食文化	金 泰虎	7
〔日本語〕超ハイブリッドな日本語はどこから世界の最果てにやって来たか	谷守 正寛	8

甲南学園創設者

平生 鈞三郎

「世界に通用する

紳士・淑女たれ」



「英語＋1（第2外国語）」
教育プログラム

「使える外国語教育」

国際言語文化センター機関紙（年3回刊行）

Aspects of Foreign Cultures Here in Japan

In English, we have the following saying: *No man is an island*. It means that no person can ever be truly independent from other people. As humans, whether we are aware of it or not, we are constantly affected by the actions of others around us.

But what about countries? Some countries really are islands, right? Japan is a typical example of this. It is a group of islands huddled alone in the sea, quite far from its closest neighbors. Is it affected by other countries and cultures? Of course it is. The modern influences are more obvious to us in our globalized era because distances are bridged so easily these days. But in fact intercultural encounters and exchange have been with us ever since human societies first formed.

Most humans have a deep sense of curiosity and wonder. These have led us to overcome great distances and other barriers throughout history in order to encounter other cultures. In this issue of *Zephyr*, we explore some of the interesting ways that this long history of cultural encounters affects us here in Japan.

(Thomas MACH)

外来語の影響と英語学習

国際言語文化センター所長 津田 信 男

以前、英会話学校で教えていたときに、ある学習者が“I like hamburg.”と言ったので、“hamburger”と直したら、「ハンバーガーはマクドナルドなどでパンに挟んで食べる物で、レストランで食べるハンバーグ(肉)はhamburgじゃないのですか?」と質問されました。「どちらもhamburgerです」と答えても納得されなかったことを覚えています。この学習者には、外来語の「ハンバーグ」が英語として定着していたため、このようなことが起こったのだと思います。

私たちは日常生活であまり意識をせずに外来語を使っていますし、英語でコミュニケーションを交わす際、外来語を使えば意味は通じると思い込んでいる人たちがたくさんいます。ここでは、英語で使うと誤解されやすい外来語や意味をなさない外来語をいくつか紹介しましょう。

1. 誤解されやすい外来語

「ストーブ」というと暖房器具のことですが、アメリカ英語では、キッチンにある「コンロ」の意味になります。詳しくは、一般的にコンロとレンジのセットになっている物を“stove”と言います。日本語のストーブを英語では、“heater”と言います。石油ストーブは、“kerosene heater”です。

「エアコン」は、“air conditioner”の略ですが、日本にあるエアコンは冷房と暖房の機能が付いています。アメリカにあるエアコンは、冷房のみで暖房の機能はありません。アメリカの家庭はセントラルヒーティングを使うので、暖房機能は必要ないのです。例えば、“It’s too cold. Let’s turn on the air conditioner.”と言うと「なぜ寒いのにエアコンを使うのだろうか」と誤解されるかもしれません。

「トイレ」は、オーストラリアの英語では、日本と同じトイレですが、アメリカで“toilet”と言うと「便器」という意味になります。家庭のトイレは“bathroom”で、もしトイレを借りたい場合、“Can I borrow the bathroom?”ではなく“Can I use the bathroom?”になります。“borrow”は、「借りて持って行く」という意味です。公共のトイレは、“restroom”です。私がハワイのテーマパークで働いていたとき、“Where are the restrooms?”とよく聞かれました。女性からはたまに“powder room”と聞かれたこともありました。

2. 英語で通じない外来語

車の「フロントガラス」という言葉を日本ではよく使いますが、英語では全く通じません。フロントガラスは、“windshield”です。また、車の「ハンドル」は、“steering wheel”か“wheel”になります。自転車の「ハンドル」は、“handle bar”です。英語の“handle”は、「(ビジネスで使うようなバッグの)持つところ」や「取っ手」という意味になります。

「SF」は、“science fiction”の略だと思っている人が多いかと思いますが、英語では、“sci-fi”と略します。また、ここ数年英語のライティングクラスのエッセイで「CM」と書く学生がいます。“CM”は和製英語で“commercial”と言わないと通じません。

3. 英語学習のアドバイス

自然な英語を表現するためには、普段から英語の多読やリスニングを通して用法・連語を知っていると便利です。例えば、“rotten apple”「腐ったりんご」という連語を使いますが、“rotten milk”という英語の表現はなく、“This milk is sour.”「腐った牛乳」になります。ですから、いくら単語だけ覚えていても、用例・連語などを知っていないとうまく表現できません。電車通学の短い時間に英語で何かを読んだり聞いたりすることを習慣化することで、自然な英語を身につけることができます。是非、実行してみましょ。Give it a try!

ヨーロッパ文化との交流：「和魂洋才」

国際言語文化センター教授 中村 耕二

神戸の街には、福沢諭吉の標榜する「脱亜入欧」のプロパガンダを超えた「和魂洋才」の知恵が見られます。神戸は、巨大な港を有し、地政学的にも世界に向かって解放された街です。神戸は外国文化を積極的に取り入れ、自文化と融合させてきた「進取の精神」を育んできました。我が国が英国文化や諸外国の文化をいかに取り入れ、日本人の心の習慣を失わない独自の文化を形成してきたかを考えたいと思います。

神戸はゴルフ、サッカー、映画（活動写真）、ラムネ（レモネード）などを英国から受け入れ、発展させてきた最初の街です。1872年、神戸市内の外国人の数はわずか453人でしたが、1900年には1908人にまで増えました。特に六甲山の開山の父と言われる英国人グループは日本最初のゴルフ場を六甲山に開設しました。ゴルフはその後全国に広がりました。

サッカーは英国人によるサッカークラブが神戸や横浜で創設され、その後、全国に普及しました。明治29年には神戸の御影師範学校（旧神戸大学教育学部）がサッカーを受けいれました。そして英国人が中心の神戸の外国人クラブと友好試合が行われました。その後、近畿地方がサッカーの先進地になりました。

明治政府は殖産振興のために、ヨーロッパから多くの技師や学者を受け入れました。例えば、1868年に来日した英国人のジョセフ・ディックは角島灯台長になり、日本文化をこよなく愛し、1914年に神戸の外国人墓地で永眠しています。角島灯台は「灯台の父」と呼ばれる英国人リチャード・ヘンリー・ブランチンの設計による灯台で、日本海では初めての洋式灯台です。英国から学んだ全国2200以上の灯台の技術は航海の運航を安全なものにし、海運国としての発展に寄与しました。

また、ジョセフ・ディックは鉄道列車に不可欠な信号技術を伝授しました。日本で最も海と山が接近した景観の地である須磨・舞子・明石を走る列車が英国人と日本人技師の努力で1909年に開通しました。日本人は英国から鉄道技術を学び、定着させ、最新の新幹線まで発展させました。新幹線に代表される日本の鉄道技術とシステムの信頼性は世界でも認められています。今年7月に日立製作所は英国の都市間高速鉄道（IRP）を正式受注し、その総事業規模は5500億円で、英国の鉄道史上最大規模となります。運行開始は2017年の予定で、日立は596両の車両を納入します。まさに日本の鉄道技術は和魂洋才の一例です。

私達の身近な英国文化との交流としては、毎年大阪で開催されている英国フェアがあります。英国産の食品、衣類、家具、装飾品などが展示され、連日日本人客で満員です。英国フェアは1970年に阪急梅田本店で開催され、すでに49年間、英国人と日本人スタッフとの協力で大阪に定着しました。

英国と日本は共に島国であり、歴史的にも共通性が多くあります。ヨーロッパできわめて早い段階で統一（1066年）された英国。1603年というアジアでも極めて早い段階で統一された日本。日本は最初に議会制民主主義を確立させた英国議会から民主主義、さらに、フランス人のモンテスキューからは三権分立を学びました。私達の国は英国やフランスとの交流を通して発展し、多くの欧米文化を独自の方法で日本に定着させました。EUから離脱した英国の進む道を注視しながら、日本の融合文化を再考することも大切です。文化は衝突するものでなく、交流し融合する時にさらに発展するものです。

今の日本は「和魂洋才」の精神を大切にしながらも、アジアの近隣諸国と共存する道を模索すべき時です。その平和共存の鍵が軍事力や極端な国益中心のナショナリズムではなく、文化の交流と相互文化の尊重の中に隠されていると思います。先人の文化交流の知恵を学び、歴史文化の教訓を忘れず、平和な未来を構築しなければなりません。先人が努力し、若い世代に受け継がれる文化交流は心の扉を開き、平和な未来の扉を開く鍵になると思います。

“The Future depends on man’s being able to transcend individual cultures.”

(Edward Hall, 1976)

日本に広がったドイツの焼き菓子

～第一次世界大戦と関東大震災を乗り越えたドイツのケーキ職人～

国際言語文化センター講師 野村 幸宏

ドイツ語版ウォールストリート・ジャーナルのインターネット版に「100年—第一次世界大戦の足跡をたどって」(100 Jahre auf den Spuren des Ersten Weltkriegs) という特集が組まれています (<http://www.wsj.com/ww1/de/>)。戦争やその時代の政治、社会や文学に至るまで、幅広いトピックスが扱われている中で、一見戦争とは関係のなさそうな「日本におけるドイツのケーキ」(Deutscher Kuchen in Japan) という見出しは、小さいながらも目を引きまします。実はドイツのケーキ職人協会のシンボルマークにもなっているバウムクーヘン(ドイツ語でBaum = 木、Kuchen = ケーキ)が日本に広められたのは、第一次世界大戦がきっかけだったことをご存知でしょうか？



ドイツケーキ職人協会の
シンボルマーク

カール・ユーハイム (Karl Joseph Wilhelm Juchheim) 氏は、第一次大戦中に日本軍の捕虜として大勢の仲間とともに日本に連れてこられることになりました。日本での捕虜生活を余儀なくされた氏が、もともとケーキ職人だったのが、日本でのバウムクーヘンのそもそものは始まりだったのです。1919年、広島で行われた物産展示会で、戦争捕虜が作った作品の展示即売会が開催されたのですが、そこでユーハイム氏はバウムクーヘンを焼くことになりました。これが日本で作られた初めてのバウムクーヘンです。材料や道具を集めるのに苦心しながらも、氏の焼いたドイツの伝統的なお菓子は展示会に訪れた日本人から絶賛され、「ぜひ日本でバウムクーヘンの店を開いて欲しい」との声を受けたそうです。

ユーハイム氏は元々、戦後は兄弟の一人が住むアメリカに移住するつもりになっていたのですが、広島での成功をきっかけに、日本に残ってケーキ職人として生きていくことも考え始めました。そして第一次世界大戦が戦後し、捕虜は解放され、ほとんどのドイツ人捕虜がドイツに帰国する中、ユーハイム氏はドイツから妻エリーゼを呼び寄せ、まず東京銀座のカフェでケーキ職人として働きます。そこで氏の焼くケーキが再び高い評価を受けると、1922年に夫婦で横浜に自らのケーキ店を開店。その後、関東大震災に見舞われるという不運もありましたが、次に場所を神戸に移して、改めてケーキ店を立ち上げます。これが、現在では日本のバウムクーヘンの代名詞ともいえるブランド「ユーハイム」の誕生です。ここからドイツの伝統的焼き菓子が日本に広がり、今ではドイツ人をして「本国ドイツよりも一般的なお菓子として愛され、そのバリエーションも広く、食料品を扱う店にはほぼどこにでも置かれている」と驚きをもって評されるほどになりました(ドイツの経済誌 Brand eins 2013年1号より <https://www.brandeins.de>)。1945年にカール・ユーハイム氏は他界し、妻エリーゼは一時ドイツに送還されるものの、その後再び来日しユーハイムの発展に尽力しました。

今まで何気なく口にしていたバウムクーヘンにも、このように思いもかけない歴史と人々の努力と苦労があったのです。ドイツ本国よりも手に入りやすく、日本で広く愛されているバウムクーヘン。もしユーハイム夫妻が、すっかり現代の日本人の生活の一部になったバウムクーヘンを見ることができるとしたら、どのように感じられるのでしょうか？

甲南大学の今年のドイツ語学習者のための合宿では、より詳しくユーハイム夫妻の足跡をたどり、バウムクーヘンを通じて、よりドイツを感じてみよう、ユーハイム社を見学に行っていました。

また、11月中旬からは大阪梅田スカイビルで恒例のドイツクリスマスマーケットが開催されます。クリスマスの飾り、ドイツのクリスマスの風物詩ホットワイン (Glühwein) やソーセージの屋台が並ぶ中、バウムクーヘンをその場で焼いて販売している屋台が毎年出店しています。長い棒状の芯に、緩めのケーキ生地をかけ、火のうでで回転させながら焼くという、他のケーキとは少し違ったユニークな焼き方が生で見られるチャンスですので、是非ご覧になってみてください。

150年間を超える日仏交流関係の歴史の中で、様々な分野において、日本はフランスの影響を受けて来ました。芸術分野では、フランス語がそのまま使われています。例えば、「アール・ヌヴォー」(art nouveau) や「アール・デコ」(art déco)、「キュビズム」(cubisme)、「フォヴィズム」(fauvisme)、「シュルレアリスム」(surréalisme)。最近では、「アール・ブリュット」(art brut) も見かけます。日常生活でも、フランス語の単語が使われています。また、ファッションの世界では「アンサンブル」(ensemble)、「パンタロン」(pantalon)、「ポシェット」(pochette) などがあります。料理の世界では「オムレツ」(omelette)、「フィレ・ミニョン」(filet mignon)、「シャトーブリアン」(chateaubriand)、「ソルベ」(sorbet)、「クレープ」(crêpe)、「タルト・タタン」(tarte tatin)、「シャンパーニュ」(champagne)「パン」(pain)、「バゲット」(baguette)、「クロワッサン」(croissant)、「カフェ・オ・レ」(café au lait)、「ショコラ」(chocolat)、「ブリオッシュ」(brioche) などがありますし、食文化に携わる職業「パティシエ」(pâtissier) や「シェフ」(chef) もあります。ワインの世界でも、「ソムリエ」(sommelier) という言葉をよく耳にします。このような言葉は、日本人が持っているフランスのイメージを反映していると思われます。それは、《生活を楽しむ術》を尊ぶ国だということです。同様に、バレエやフェンシングなどでは、フランス語がそのまま使われています。「ツール・ド・フランス」(Tour de France) という世界的に有名なスポーツ・イベントがありますが、舞台を北海道に移して、「ツール・ド・北海道」という同じような競技が開催されています。

さて、「和製英語」と同じように、「和製フランス語」もあります。例えば、先に挙げた「ソムリエ」。元々は、ワインに精通し、料理にマッチしたワインを客に勧める仕事を指しますが、日本では「野菜ソムリエ」のような言葉が使われているようですね。

また、フランス語で「アベック」は、「～と一緒に」(英語のwith) という前置詞で、単独では使われない単語ですが、日本では、単独で恋人同士を指す言葉になっています。また、パリ(Paris)に住む住民のことをparisien(男性)、parisienne(女性)【発音をわかりやすく日本語表記にすると、男性にパリジアン、女性はパリジエンヌ】と呼びます。日本人がパリジェンヌと発音する「ジェ」は、Parisの最後のsがあるから出てくる音です。ところが、日本では、「パリジェンヌ」に似せて「タカラジェンヌ」という言葉ができ、宝塚歌劇団での団員を指しています。フランス語の理屈からすれば、宝塚(Takarazuka)から「タカラズキエンヌ(Takarazukienne)とでも呼びたいところです。

最近、面白い現象として、元々のフランス語の価値観も取り込んだ表現をよく耳にします。petitという形容詞の意味は「小さい」ですが、「ちょっとした」という意味もあり、日本語でも「プチ・ブライス」、「プチ贅沢」「プチ整形」といった言葉が使われています。

最後に、「生徒が先生を超えてしまった例」と言えるかどうかはわかりませんが、フランス発の習慣が本国以上に日本に根付いたケースがあります。「ボージョレ・ヌヴォー」(Beaujolais nouveau)です。ボージョレ産の新酒が11月中旬に市場に出回り始め、11月第3木曜日に解禁となります。新酒ですから、コクのある上質なワインではありません。しかし、季節感を尊び、また「初物」が好きな日本人は、時差の関係でフランスより8時間早く解禁日を迎えることもあり、空港に到着する貨物便を迎えに行くほどのフィーバーぶりが報道されたことがありました。最近は少し落ち着いてるようですが、それでも、毎年、ニュースになることに変わりはありません。

¹ フランス語では、(地名の最後の母音によりいくつかの型がありますが)地名に接尾辞「イエンヌ(-ienne)」をつければ「その場所に生まれた(または住む)女性」という意味になることが多いからです。

文化 日本と中国、その深いつながりへ

国際言語文化センター准教授 石井 康一

——漢字・漢語は、明治期の外国語翻訳の際、とりわけそのすぐれた造語能力を最大限に発揮した。それは自然科学、社会科学、人文科学等すべての分野に及んだ。平易簡単でしかも含蓄に富んだそれらの漢語は、日本の諸科学の急速な進展に寄与しただけでなく、漢字の老家である中国にも輸出されて定着し、すくなく影響を与えた。

——海知義『日本語の中の漢字文化』

○日本に定着している中国の文化といえは、まず何と言っても「ことば」でしょう。中国から漢字を通して伝来した言葉を取り込んで、私たちの日本語が成立しました。私たちは日本語の中で漢字を使いこなしています。そして第二外国語としての中国語学習の過程は、それが深いところで日本語と結びついていることを知る、自国の言語と文化を再認識する過程でもあるのです。階層=階層、买=買、卖=売、生産线=生産線、认识=認識、反响=反響……字体の違いは厄介ですが、共通の語彙を生かして学習を進めることができます。

○NHKテレビで見た「ドキュメント72時間—長崎 お盆はト派手に花火屋で」にカルチャーショックを受けました。中国では春節（旧正月）の時期に派手に花火・爆竹を鳴らします。私も一度経験しましたが、毎夜、街のあらゆる場所で戦場のような爆音が数時間続き、空気も汚染されるし、赤ちゃんやお年寄りはどうしているのかと不思議に思いました。日本にはない中国独自の習慣だと思っていたのですが、長崎人、特に初盆を迎えた長崎の人がお盆のときだけお墓の前で、そして街中で鳴らしているのです。数十万円分の花火・爆竹を「爆買い」して燃やし尽くす人もいます。そうでもしないと癒されない身近な人を喪った悲しみに、私は強く共感することができました。江戸時代も開かれていた長崎だからこそでしょうが、どこかでつながっている中国と日本の深い縁に感動しました。お盆の時期の長崎を一度は訪ねてみたいと思うようになりました。

——奈良・西ノ京の唐招提寺は唐から来た鑑真のために創建された。仏の加護により国と民を守ろうとした聖武天皇は、僧たちに受戒させる高僧を唐から招きたいと切望された。その意に応じて唐から来日した高僧が鑑真だ。荒海での航海にチャレンジすること6回目にして日本に辿り着いた時すでに60代半ば。（中略）国宝である鑑真和上坐像の存在感は見るものの精神を引き締めてくれる。鑑真の生前の姿を留めたいと願った弟子の手でつくられたと伝えられているが、無私の魂の静けさを表した名作だ。

——里中満智子（『古都さんぽ』朝日新聞 2016年8月27日）

○先日、秋の唐招提寺を訪ね、奈良時代から今日に至るまで中国と日本のよき連携を願う無数の人々が紡いできた千数百年の歴史に思いを寄せました。帰りに西安料理の「王楽園」（近鉄奈良線学園前駅すぐ）でジャンジャン麺（唐辛子と黒酢をきかせた超幅広麺、この麺のためだけの特別な漢字で変換できないので検索して下さい）を食べました。西安出身の店主が日本人向けの中華料理を作るだけでなく、本場の西安の味を定着させようと挑戦しています。現在の海外語学講座Ⅱ（夏の短期留学）の行き先是北京郵電大学ですが、以前は西安の西北大学でした。引率教員として総計三か月近く滞在した陝西省の古都西安の名物を美味しくいただきました。

○唐招提寺（写真・近鉄橿原線西ノ京駅より徒歩）の他に、日本に定着した中国文化を考えるために訪ねてほしい場所を挙げます。①「中国革命の父」と、彼を支援した日本人を記念する孫文記念館（舞子）②中国人の食へのエネルギーが充満する神戸元町の中華街③関羽を祀る神戸の関帝廟④国際貿易都市・神戸の発展に大きな役割を果たした華僑の歴史を学ぶ神戸華僑歴史博物館⑤古代中国の文物を所蔵する白鶴美術館（甲南大学の近くです）



○「爆買い」熱が過ぎた今も、京都の錦市場や大阪日本橋の黒門市場ではたくさんの中国語を耳にすることができます。日本と中国のことばと文化のぶつかり合いからまた新しい文化が生まれることを期待したいですね。

『日本書紀』によると、天武4（675）年「殺生禁断令」が出されて初めて肉食が禁じられたが、その後も日本社会では繰り返し「殺生禁断令」が出されてきました。その背景には仏教思想が色濃く反映されていると考えます。中世の日本では、文永の役（1274）や弘安の役（1281）という蒙古襲来を経験しながらも、その支配下に入らなかったため、肉食を中心とする蒙古文化の影響は受けていませんでした。つまり、肉食の禁止という社会秩序を守り抜くことができました。

一方、前近代の韓国、つまり三国時代に仏教が伝来され、統一新羅（668～935）と高麗時代（918～1392）には仏教が国教のような地位でした。しかし日本とは異なり、仏教の信仰が盛んだったにも関わらず高麗の中期以降、蒙古の影響力が強まると、肉食をするようになります。一般的に韓国の肉食文化は蒙古から伝わったと言われています。この肉食文化は儒教を国家理念とした朝鮮王朝時代（1392～1894）に引き継がれることになり、今の韓国社会に定着します。

ところで、日本では長い「殺生禁断令」の期間を経て、明治5（1872）年『新聞雑誌』に肉食を奨励する記事が掲載されており、肉食が解禁されました。そこで、日本社会の肉食文化を考察すると、韓国の肉食文化の影響を受けている痕跡が色濃く残っていると言えます。

その代表的事例として、ホルモン料理を取り上げることができます。ホルモン料理とは、牛や豚の内臓を使った料理です。冒頭で言及してきたように、日本では禁肉の歴史が長く、肉食を始めた歴史が浅いため、動物の内臓を料理にしたり、有効利用したりすることができず捨てていました。戦後に物資が乏しい時期に在日韓国人は、日本人が捨てていた内臓を拾って料理にしたのです。それがホルモン料理なわけですが、ホルモンは体内の生理活性物質ではなく、大阪弁の「放るもの」が訛って「ほるもん」に変わったと言われます。つまり、日本社会で動物の内臓が「放るもの」であったことに由来しています。ちなみに、ヨーロッパ（Europe）のフランス（France）やイタリア（Italy）などでは、動物の内臓は高級食材として扱われます。

さらに、日本ではホルモン料理以外にも焼肉屋の肉に関するメニュー（Menu）に韓国語の語彙が見られます。例えば、テッチャン（大腸：대창）、カルビ（갈비）＝肋骨肉、ユッケ（肉脷：육회）、センマイ（千葉：천엽）などの言葉です。これら肉食を中心とする文化は、戦前から日本に住んでいて定住している在日韓国人が日本社会に広めたと言われています。



実に、韓国では様々な肉料理が発達しており、カルビでも焼いて食べる「ブルカルビ（불갈비）」、蒸して食べる「カルビチム（갈비찜）」、煮詰めて食べるスープ（Soup）の「カルビ湯（갈비탕）」など調理法が多いです。そして、内臓の腸も焼いて食べたり、蒸して食べたり、煮詰めて食べたり、西洋のソーセージ（Sausage）のようにして食べたり（スンデ：순대）、さらにこれをスープにして食べたり（スンデ汁：순대국）するなど多種多様の料理があります。しかし、日本では一般的に焼いて食べる料理を中心に定着し、他の調理法による料理は韓国料理専門店ではしか食べられないです。

最近、日本社会ではグローバル化時代の西洋からの影響が強まり、焼肉よりはバーベキュー（Barbecue）を好む人も増えてきています。そこで、焼肉とバーベキューは、肉を焼いて食べる行為は同じであるが、両者には副菜の内容や食べる場所などに多少の差があると言えます。

このように、日本の肉食文化の背景には、政策、宗教、調理法、料理、そして時代の流れが複雑に絡み合っています。とりわけ、日本社会における焼肉は、韓国料理というイメージ（Image）が強いことから韓国肉食文化との繋がりが確認できます。

超ハイブリッドな日本語は どこから世界の最果てにやって来たか

国際言語文化センター准教授 谷 守 正 寛

壮大なテーマですが「遙か昔に日本語（又はその祖語）はどこから来たか」、つまり、どんな人（日本人になった人）が日本へもたらしたか、については定かではなく、敢えて結論を言うと「いろいろな所から」となるのでしょうか。或いは後に日本で劇的に融合・変容したのでしょうか。筆者はこのことについて研究しているわけではありませんが、学術的でなくとも、勝手な想像ながらある程度の目星を立ててみるのも面白いかもしれません。ところで本来の日本語（大和言葉）とは、例えば、漢字語で言う「開始する」に対して「はじめる」といったものですが、ここでは近年の外来語レベルの話ではなく、遙か太古の時代に生まれた大和言葉の話になります。

まず、みなさんは辞典のラ行には語が少ないと思ったことはありませんか。尻取りでも困りますね。これは、ラ行の単語、つまり [r] の音で始まる語は外来語（漢字語も）ばかりだからです。本来、大和言葉は語の最初に [r] の音が来ません。「るろうに剣心」は [ru] で始まりますが、これも「流浪人」の「流」の音なので、中国語という外来語の語音になります。

次に「食って」「三宮に」「牛井を」「僕は」といったテニヲハ、いわゆる助詞があります。また「菊花賞で当てた馬券」のように、英語とは連体修飾の語順が逆だったり「もう宝くじを買った」のように、文末に用言が来る SOV 語順で、文中に他の要素を置きます。こんな点も日本人が英語下手な一因でしょう。こうした特徴はアジア大陸のモンゴル〜ツングース語等のアルタイ語系の人々が、人類発祥の地からみて世界の最果て日本列島にやって来て日本化させたようなのです。

日本人なら「アポー」と言いそうな apple の [p] のような連続子音や、read と lead のような [r] と [l] の区別も大和言葉にはありません。これは誰もが英語の発音で悩まされたでしょう。この特徴は南方からポリネシア系の人達が日本列島に流れてきてもたらしたそうです。

インド南部のタミールから来たという学者もいます。日本語に入ったとされるその学者が調べたタミール語で、日本語に近いものを拾ってみましょう。眺めてみると面白いものです。タミール語では katt-a が「堅」、kan が「金」、ati が「足」、kucci が「串」、tar-i が「樽」、naru が「成る」、mat-ai が「祭る」、nukk-u が「ぬか」、ami-r が「海女」、tav-ir が「旅」、tupp-al が「唾」、tamp-al が「田んぼ」、pat-ukar が「畑」、acc-u が「畦」、mat-il が「町」、kum-ai が「米」になったということのようです。つい納得させられそうになります。

しかも、タミール語の語順も日本語と同じく、SOV 語順だけでなく、用言+被修飾語の語順をとるそうです。インド南部から日本に民族大移動？確かに最近、奈良の平城宮跡の木簡にもっと遠いペルシャから役人が来訪した証拠が出たので、太古に想定外な遠隔地から来日した人がいても不思議ではありませんが、少人数では日本語に変容をもたらしにくいでしょう。筆者の想像ですが、同じ語順はアルタイ諸語に見られるので、語彙はともかく人種的にタミールの原住民はかなり違うし、インド南部から日本に来たというよりは、アジア大陸の他地域からインド南部に波及し、日本語と似た文法がそこにも存在していたと言えるのかもしれない。

「口」はビルマ系の語では khu、「目」が mu で一致する語があるという人もいます。実際、筆者も近辺の少数民族村で粽（ちまき）を食べたことがあります。日本の粽とそっくりで、言語も文化も人と共に越南〜福建辺りから海流に乗って日本に入ったのだろうと想像できます。やがて系統の異なる中国語からは漢字を取り入れて、文字と共に日本語が出来上がります。

発音は口と舌の活動なので方言のように時と共に変化しやすいものですが、語順が容易にはひっくり返らないように文法体系とは変容しにくいものです。似た文法体系、語彙とそれを裏付ける粽のような類似の文化事象が、日本語成立過程を推定する材料になるでしょう。